
曖昧my愛

飼育係

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曖昧my愛

【Nコード】

N3876U

【作者名】

飼育係

【あらすじ】

「love」と「like」の違い？ つまり「好き」ってどういうこと？

草食系（ベジタリアンの意味）で、恋愛方向音痴な二人の、色気皆無な交流のおはなし。

先日。恋に酔ってマールライオン（前書き）

はじめての長編（長くなるかは不明）なので、あまり期待しないでください。

注意

一応恋愛ものと銘打ってますが、基本ラブラブしません。ラブラブしてるのが好きでしたら、この作品には荷が重いです。これを読んで「あー、恋愛したいなー」となることは、ほぼありません。

ほぼない、はずです。

いろいろもろもろ、予告無しに変更することがあります。

作者は、計画性の無さには定評があります。

先日。恋に酔ってマールライオン

気持ち悪い……。あ、どうも、ミナナミといいます。逆から読んでもミナナミです。

現在、私はファストフードなハンバーガーショップで、友人の力ナコからお説教を受けておるのです。

内容は、ずばり「ラヴ（下唇を噛んで発音）」についてです。鳥肌ものです。

カナコが愛と恋の違いを喜々として語る間、私は胃から競り上がってくる酸っぱい物と闘っていた。愛は甘くて恋は酸っぱいなどと教授されたが、恋の酸味なんて、胃酸と較べたらアルカリのようなものはずだ。

「だからあ——ねえ、聞いている？」

「聞いている聞いて、るうぷっ」

一方的に喋っていてほしい。私が口を開いたら、シンガポールの象徴として祭り上げられそう。

「なんでそんな顔色が真っ白なの？」

「いいから、続けて」

いくら気心知れた友人とはいえ、頭から胃酸を被りたくはないだろう。精神的ショックの度合いなら、硫酸と競う気がする。

「だから、合コン行こうよー」

「おうえっ、や、やだ」

今の嗚咽にはなんの意図もないのだけど、結果的に心からの拒否をアピールする結果となった。

「なんで嫌なの？ ミナ、可愛いんだから、彼氏くらい作らないと！」

「いや、私ってばO型だから……」

「関係ないよう！」

じたばたしているカナコを見て、アンタのが可愛いと思った。

「カナコのが可愛いよ」

思ったそばから言った。頭を叩かれた。その勢いでマーライオンしそだった。

「もうっ、いつもいつもテキトーなこと言っつて」

「本心なんですが……あ、ごめん、もう無理」

席を立って、上下動ほぼなしでお手洗いへ。以下、描写に耐えられないので割愛。

「ただいまぁーん」

一連の動作を経て、だいぶ気分は楽になった。席に戻って、真っ白から真っ青くらいに回復した笑顔を向ける。

「……なんか、酸っぱい匂いがするんだけど」

「んー、恋の味だね」

「絶対違う……」

あまりに手応えのない私の反応に、カナコは眉から力を抜いて、へにやりと潰れた。

「てゆーかさ、合コン持ち出した瞬間、吐きそうになるのやめてよ」

「いや、その前の恋愛論からだけど」

どうにも、色恋の話は体が受け付けない。

「あ、そ。そんなに嫌なの？」

「カナコさ、数学苦手でしょ」

たしか平均以下だったはず。

「まあね」

「難しい問題見たら気持ち悪くなるでしょ。それと同じ」

ちなみに、私はそうでもない。わりと賢いのだ。それでも、一般

的な恋愛観というのはわからない。

「難しい、ですかー」

カナコにはわからない感覚だと思う。恋多き子で、それなりに経験豊富だろうし。

「だからごめん。不参加にチェックってことで」

「ま、予想はしてたけどさー。あまりに即答だとにゃー。うーむむむ……」

「嫌な予感ひしひし」

こうして考えた後のカナコがやることは、たいてい私を苦境に立たせる。

「じゃ、はいちーず」

ぴろりん♪

「え、ちょっ」

カナコがケータイのカメラを向けてきて、躊躇なく私を撮影した。変な顔はしてなかったと思うけど、驚いてる顔はしてるはず。

「『この子来るよ、はあと』はい、そーしん」

「え」

嫌な予感ひしひし。

「『ちょー可愛い、楽しみー』だって。ひゅーひゅー、ミナミたんモテモテー」

「勘弁してよぉー」

泣きたい。私みたいなのは、恋なんて高尚な酸味じゃなくて、胃酸の酸っぱさで充分なのに……。

あ、やっぱり胃酸は嫌。

初日。草食動物ふれあい公園

結局「私を嘘つきにしないで！」とカナコに泣き付かれて（嘘泣きであることは言わずもがな）、私は百歩譲って、四対四の合コンに参加を決めた。

代償として、合コンに関して発生した支出は、全てカナコが負担することとなった。

タダ飯が食べれるんだと考えれば、まあいいかな。

女子とはいえ育ち盛りである。しかし私はベジタリアンである。

……あれ、なんか割りに合わない気がする。

「帰りたい……」

集合場所にはすでに到着していて、その合コン集団であろう人達は視界に納めている。そして現在時刻は集合時間の十分前。

軽く挨拶でも交わしながら合流すればいいのだろうけど、気が重たい。体重の二乗くらい。

男子達とは、面識なんてない。事前に見せられた写メを見せられただけ。ただ、仲良しなんだろう。それはわかった。

カナコはまだ来ていないようだ。というか、見たところ女子がない。男が四人、ぼーっと立っているだけ。

まさか「ごめーん、待ったー？」なんて言いながら現れるのでは

なかるうか。約束しておいて？　それは、どうなんだろう。

「すみません、お待たせしてしまつて」

結局一人で合流することになった。五分待ったけど、それでも力ナコは来なかった。

「いや、まだ時間前だから。他の子は？」

「わかりません。ここに集合だつたんで……」

「そつか。はは、そんなに緊張しなくていいよ。敬語も取っちゃつて」

慣れてるのが、男子達は平然としてる。堅くなつてる私に向かつて、へらへらと笑顔を向けている。

いや、一人だけ、眠そうな顔をしてる人がいた。服装も、他の三人と比べたら、わりと地味というか、飾らない感じ。

「大変だね」その人が、私に口の動きだけで伝えた。他の三人は気付かないように。

私は小さく頷いた。気乗りしてないのは、同じみたいだ。少し気が楽になった。いざとなつたら、途中で一緒に抜け出そう。誤解されるかもしれないけど、そのくらいならべつによかった。格好悪いわけでもないし。

「お待たせー」

私が逃げる予定を立ててたら、カナコ達が来た。なんかきらびやかだ。ほぼ普段着の私とは、心構えが違う。

「じゃあ行こっか」

男子の先導で、冬眠するてんとう虫みたいに固まって、ゆっくりと歩きだす。

集団から気持ち離れて歩いてた孤高のてんとう虫である私に、カナコがすすつと近付いてきた。

「どう？」

「どう、って何が？」

「気に入ったのはいる？　ってこと」

「余ったのでいいよ。あの二人に先に聞いてきなよ」

きらびやか垂れ流しな女子二人は、私の知らない人だった。また気分がマイナス方向に。

「てゆうかあの二人、誰？」

「お隣のクラスの人」

「で、男性陣は？」

「近くの学校の人。ちなみに同い年だよ」

なんてグローバルなメンバーだ。同じクラスの人くらいしか友達
がいない私じゃ、一生知り合わない人達だろう。

「帰りたい」

新たな関係性の構築が楽しみ、ということではなく、そこは変わら
ない。

「さつさと相手見つけたら帰っていいよ」

「相手って……」

「みんな結構ミナのこと気になってると思うけどね」

それだけ言って、カナコはみんなの会話の中に入っていった。

気になってる、ねえ。性格も何も知らないのに、付き合いたいな
んて思えるんだろうか。みんな、思ってるのかな？

「みんな、楽しそうだねえ」

さつきの地味男くん（仮）が、いつの間にか隣を歩いていた。な
んか、孫を見守るお爺ちゃんの雰囲気でみんなを見てる。

「そうだね」

なぜだかとても気楽に話せた。絵の具が自然に馴染むような、そ
んな感じ。

「俺、アカミネヨシヤ。ヨシヤでいいよ。君は？」

軟派、っていう雰囲気じゃない、ただの自己紹介。

「ミナナミ」

「下は？」

「……ナナミ」

あんまり言いたくないんだけどね、フルネーム。

案の定、ヨシヤくんはすぐに気付いた。

「ああ、回文ってやつだね」

「……はあ。笑いたきゃ笑っていいよ」

「いやいや、そういうのは縁起がいいんだよ。ミナナミナナミさん」

ふて腐れてる私に、ヨシヤくんは真顔でそう言った。

「そうなの？」

そんなこと初めて聞いた。驚いた私を横目でちらつと見て、ヨシヤくんは少し笑った。

「ほんとほんと」

「……嘘だよな」

どんどん目尻が下がっていつてるし。

これ以上は堪えられないのか、ヨシヤくんはあっさり嘘だと認めた。

「ごめんごめん。あんまり嫌そうだったからさ。ま、フルネームじや呼ばないから。ミナナミさんでいい？」

「ナナミでいいよ」

「じゃあナナミで」

いきなり呼び捨て。どーでもいいけど。

「んで、さっそく本題」

ん？ とヨシヤくんを見ると、悪戯を提案する子の顔だった。

「お互い、乗り気じゃないみたいだし、途中で抜けない？」

ならなんで来てるんだろう。それこそ、お互い様だろうけど。

「ヨシヤくん、彼女でもいるの？」

「まさか。そんな騙すような真似はしないし、生まれてこの方、彼女なんていたことがない」

「へえ」

まあ、もし彼女がいたら、修羅場になりそうだね。

「タダ飯食べに來ただけだよ」

思わぬ共通点を発見。味方はカナコではなく、ヨシヤくんだった。一緒に抜ける計画が、一気に現実的になる。

「私もそう。でも、ベジタリアンなんだよね」

そう言つと、ヨシヤくんは子供っぽく、歯を見せて笑つた。

「俺も肉はちよつとね。脂を大量に摂取すると、胃が溶けちゃうから」

冗談なんだろうけど、グロテスクすぎる。胃もたれ、という解釈でいよう。

「でも最近、野菜高いから。儲け儲け」

「そうなんだよね。レタスがやばい、好きなのに」

「俺はトマトかなあ」

今から合コンという男女の会話じゃない気がするけど、盛り上がったからよし。

「なーに話してんのっ？」

二人で話してるのを目敏く察知した男子の一人（最もチャライ男以下、最チャラ男）が、野菜談議に首を突っ込んできた。迂闊すぎる。

「ああ、最近の野菜の値上がりと、世界経済の関係、それと輸出入の自由化で農業がどう変わるかについて」

ヨシヤくん、すごい出鱈目を言っている。たしかに値上がりについては話したけど、世界経済まで発展してはない。

それを聞いた最チャラ男、頬を引き攣らせてフェードアウトしていった。どうやら彼は肉食系らしい。

「あいつが、俺の分を払うんだよ。無理矢理連れてきた代償ってやつ。自分の引き立て役にでもしたいんだろうけど」

「姑息だねえ。ま、たしかにあっちの方が目立ってるけどね」

「そりゃ結構」

ちよつとからかうつもりで言ったら、ヨシヤくんは平然と肩を竦めた。

ヨシヤくん、ほんとに本気でタダ飯目的らしい。

「あいつ、この前彼女と別れたらしくてね、なんか焦ってるんだよ。寂しがりなのかも」

てんとう虫が冬眠のときに集合するのは、寒さを耐えるためだから。彼は特に寒がりなのかもしれない。

「今まで何人と付き合ってたって自慢するタイプ？」

「さりげなくね」

「さて問題、今まで何回もダイエットに成功した人は、どんな人？」

「何度もリバウンドした人」

「大正解」

私とヨシヤくんは、顔を見合わせて笑った。

てんとう虫の一団は、そろそろカラオケボックスに侵入していた。それなりに大きい部屋に入って、食べ物でも注文することに。

「「サラダバーで」」

私とヨシヤくんは変な目で見られた。文句あつかい。

他の人達は揚げ物の盛り合わせとかスナック菓子とか。みんなでつつつけるようなもの。なるほどね、それで親交を深めようとするわけか。サラダバーでは難しいかも。僥倖なり。

で、いまさらみんなで自己紹介。思うに、名前も知らない人達と密室に入るとは、文化(?)とはいえ恐ろしい。

この自己紹介、面白いこともないのでカット。あえて言えば、最チャラ男ことナカムラくんがダダすべりした。

妙に生温い空気になったところで、店員さんが料理を運んできた。そのまましばらくフリーストックタイムに。

私とヨシヤくんはサラダバーをかじり始める。こつこつとこのサラダバーって高く感じるけど、奢りだから問題なし。

「俺、思っただけだよ」

「ぽり？」

正面にいるヨシヤくんが話しかけてきて、私はキュウリをかじりながら聞く。

「前世は草食動物だったんじゃないかとか」

「あー、たまに思う」

二人してサラダバーをかじる姿は、飼育小屋の兎を彷彿とさせる。

「だから最近、草食男子と呼ばれたことに、たいして抵抗がない」

「あ、やっぱり呼ばれてるんだねえ」

「そういうナナミは草食女子」

「なにせサラダバーだから、しょうがない、認める」

ぽりぽり、ぽりぽり。こつこつのも、二人の世界というのだろうか。老夫婦みたいだけど。

「ところで、楽しいですか」

「サラダバー、んまんまです」

「そりゃよかった」

楽しいかどうかには答えてないけど、ヨシヤくんは気にしてないみたいだ。

サラダバーとヨシヤくんばかり構ってる私を見兼ねて、カナコが席替えを提案した。カナコいわく、カツポー（鳥肌）が固定される前に全体と交流すべき、だそうな。

それで私は最チャラ男と向き合うことに。近くにいると、原色ばかりで落ち着かない。ヨシヤくんのモノトーンヘルプミー。

さつそく最チャラ男が私に向かって身を乗り出してくる。草食女子な私は、それだけで少し逃げ腰になった。

「っていうかナナミちゃんって可愛いよね。彼氏いないのもったいないな」

「あははー。もったいないですかー」

もったいない。はて、私はエコな女を自負していたのに（例、野菜はそのまま、生で食べる。光熱費節約）。彼氏がいらないだけで非エコのレッテルを貼られてしまった。……たぶんそんな意味じゃないと思うけど。

っていうか、なぜか敬語で話してしまった。まあいつか、なにせあつちは肉食なのだから、食物連鎖的にはあつちが上位。

「そつだよそつそつ。あ、よかつたら、俺が立候補しちゃおっかなー」

「あははー。いきなりですかー？」

落選の可能性が濃厚です、とは言えない。私を連れてきたカナコの顔を立てるためにもね。

「ダメかなあ？ 絶対大切にするからさあ」

最チャラ男の白い歯キラリ。私の鳥肌スタンドアップ。空調のせいではない。

「あははー。たくさんの女の子に言っでそつですねー」

さっきから「あははー」ばかり言っでるよ私。

私がそう言っで、最チャラ男は笑顔を引っ込めて、真顔になった。

「今は、ナナミだけだよ」

うきゃあー。その発言は、訴えたら勝てる気がする。

「……す、すみません、お手洗いにー」

私はたまらず逃げだして、トイレに駆け込んだ。

鏡を見て、白髪を探して現実逃避してみた。でも白髪なんてなかった。ぴっちぴちやぞ！

「……ぶはぁーあああ」

海より深いため息が出た。最チャラ男怖い。肉食系怖い。

呼び捨てならヨシヤくんもしてたというのに、なんだろうこの差は。自分でもよくわからないけど、たぶん草食系の仲間意識だろう。

「戻るの気まずい……」

なにせ逃げだしたんだ、いくら最チャラ男とはいえ、気分を害したに違いない。

「ちょっとミナー？」

「カナコ……」

後を追ってきたのか、カナコがトイレにやってきた。鏡の前に並んで立つ。

「なんで逃げ……って、聞くまでもないか」

「やっぱりわかる？」

「私も少し引いたからね」

にへーっと笑いあう。

「最チャラ男、怒ってた？」

「最チャラ男？」

あー、えーっと……ナ、カ？

「あ。な、ナカモトくん」

「……ナカムラくんね」

ああ、そうそう。まったく、服装と比べて名前が地味だから忘れてしまった。

「いや『照れちゃって可愛いー』とか言ってた。美人は得だね」

それはそれで嫌な結果になってる。なんて前向き最チャラ男。

「席、元に戻そうよー」

「えー？ そんなにナカムラくん嫌なの？」

「嫌っていうか……」

「見た目で判断しちゃダメ。ちゃんと話して。だいたいヨシヤくんとは普通に話してたじゃん」

「だって世間話だし……」

「……はあ、しょーがない。一つずつ隣にズレようか」

無理矢理連れてきた負い目からか、カナコが折れてくれた。感謝の気持ちを込めて抱き着いたら、調子に乗るなと怒られた。

そうして一緒に部屋に戻って、席替えを提案。思惑通りに、一つ隣にズレただけと……。

「いやあ、さっきはごめんね、いきなり変なこと言っちゃって」

「まったく。ごめんね、こいつ馬鹿だから」

「お前もだろー」

「は、はあ……」

なんと相手が二人に増えた。内訳は、私に男二人、残りの女子に男一人。そしてヨシヤくんは一人でサラダバーをかじっていた。

何このアンバランス……。

私の目の前にいるのは最チャラ男と、それをちよつと退化させた感じのチャラ男（以下、弱チャラ男）。

私以外の女子三人を取り纏めてるのが、たぶんこの中で一番のイケメンくん。カナコが少し控えめにしているとはいえ、女子二人を相手にするほどの器量良しだ。

そしてヨシヤくんが、それをのんびりと眺めている。私と目が合うと、ひょいっと肩を竦めた。なんであんなに蚊帳の外にいられるんだろう。

「ね、メアド教えてよ」

最チャラ男がケータイを取り出した。私は引き攣った笑顔で、で

も断れない。赤外線で送る。その勢いで、弱チャラ男にも教える羽目に。

「さっ、そろそろ歌おうか！」

カナコが提案した。とくに反対意見もなく、最チャラ男から歌うことに。

「助かったよカナコー」

しれつと両チャラ男から逃げて、カナコの隣、ヨシヤくんの前に移動した。

「まあメアド交換もしたし、とりあえず合格。ちゃんとメールくらいは返しなよ」

「まあメールくらいだったら……」

いくらなんでもメールまでチャライことはないだろうと、このとき私は甘く見ていた。

「お疲れー」

カナコとの話が終わると、ヨシヤくんがサラダバーを差し出しながら話しかけてきた。

「どーも」

サラダバーをかじる。ああ、落ち着く。

最チャラ男が歌う、なんか似合わないラブソングをBGMにして、ヨシヤくんに愚痴をこぼすことにする。

「なんで一人でラクしてるの」

「あつはっは。暇なのはモテないからだよ」

そう、なぜヨシヤくんだけが、狙われないのか。やる気のなさなら、私もどっこいどっこいなのに！

「でもナナミはモテてるね。羨ましいかぎりだ」

「嘘でしょ」

「うん、まあ。付き纏われるのはごめんだね。でも、人から好かれること自体はいいことだよ」

なんか悟ったようなことを言っておられる。何かいい答が貰えそうな雰囲気だったから、質問してみた。

「ねえ、恋するってどういうこと？」

「恋するってつまり……love？」

「うん」

ヨシヤくんは思いきり困ったみたいな顔になった。ああやっぱり、つまり彼も私と同じ草食動物なんだ。

「正直に言つと、わからない。適当な言葉でお茶を濁すんなら、そ

りやいくらでも答えられるけどね」

ヨシヤくんはそう言って、しばらく最チャラ男の歌声に耳を傾けていた。そしてまた、口を開いた。

「たとえば、今ナカムラが歌ってるラブソングは、異性への思いであるわけだね。まあ同性へ、なんて可能性もあるけど」

「そ、その可能性は置いといていいと思う」

そこまでディープな愛は、私の想定外だ。

「で、異性に対しての好意的な思いが全部loveなのか。逆に異性相手じゃないとlikeになるのか……それは違うよね」

「うんうん」

ちよつと難しい話になってる。けど、貴重な意見だから、ちゃんと聞く。

「異性相手でもlikeはあるし、異性に限らずloveはある。家族愛だったり」

「ふんふん、つまり？」

「最初に言ったように、わからないってこと」

「ちえっ」

結局私達は同類で、それ以上の答を聞こうなんて、無理なことな

のかもしれない。

「なんか、カラオケボックスでするような話じゃないね」

「そうかも」

最チャラ男の歌が終わって、次は女子二人が一緒に歌い始めた。
最近人気のアイドルグループの歌だ。

「このアイドルに対して、みんなはどっちなんだろうね」

ヨシヤくんは、ぼんやりとそう言った。

「私は、どっちでもないけど」

「へえ、俺もだよ。感想をしいて言うなら、人数多い」

「ああ、毎回思う」

まったく、似た者同士。

「ところで、俺のことはどっち？」

すると唐突に、ヨシヤくんが照れもせず聞いてきた。好意の有無なら、まあ有りだけど。

「今日初対面なのに？」

「一目惚れなんて言葉が、この国にはあるそうだけど」

「縁遠いね。もしかしたら、私は外国人かもしれない」

「俺もだよ。つまり、せーの」

ちょうど歌の間奏で、言葉はやけにはっきりと耳に届いた。

「I like you」

とくに理由なくハイタッチしてみた。みんながびっくりして見えてきた。これは、ちょうどいい。二度目のハイタッチを装って、ヨシヤくんの手を取った。

「私、ヨシヤくと話したいことがあるので、一緒に帰ります！
ぐっばい！」

高らかに宣言した。

「え、ちょ」

最チャラ男が何か言おうとしたけど、それを聞かずに走りだす。当然、ヨシヤくんも引きずられるように走る。

部屋を出る瞬間カナコを見ると、親指を立てていた。でも残念、カナコが思うような展開は、私達の間にありえない。

カラオケボックスから脱走した私達は、その近所の公園にやってきた。

ベンチに並んで座って、呼吸を整えてたら、メールの着信音が鳴った。

「あれ、なんかメールきた」

「ナカムラでしょ」

「せ、いか、いい？」

言い淀んだのは、まだ登録してなくて、名前が表示されなかったからだ。でもたぶん最チャラ男のはず。

中身を見ると、記号と絵文字でてんやわんやになっていた。意味なくけばほしい。

「なんて？」

「読めない。外国語みたい」

とりあえず、わからない旨を返信しておいた。今度は日本語で送ってくるだろう。

「で、抜けちゃったねえ」

「抜けちゃったねえ」

公園では、休日の昼間ということもあり、子供達が鬼ごっこやら砂遊びやらをしていた。ヨシヤくんと一緒に眺める。

「みんなは、いきなり抜けた俺達を、いったいどう思ってるんだろ
うね」

ヨシヤくんが、遠い目をしてぽつりと呟いた。私は砂場にできてるお城に関心しながら、何気なく言う。

「駆け落ち、とか？」

「あつはっは」

あっさり流された。まあ、くだらないジョークだから、いいんだけどね。

「実際、男女が二人でいると、周囲からはそういう目で見られるよ」

「ふうん。まるで経験があるような物言いだね」

「まあね」

昔の話だけど。

「中学生の頃、よく一緒にいた男子がいて、そりゃまあ、結構仲良くしてたのね」

「友達として」

「そう。でも、いつの間にか恋人みたいな話になっててね。しかも、その噂を流してたのが、その男子だったわけです」

「めでたしめでたし」

「いや、めでたくないから」

真剣に聞いているんだろうか。ヨシヤくんの目は、鬼ごっこに向いていた。

「それからかな。こんな性格になったのは」

独り言のように、それで締め括った。話すことで、楽になることもある。

「俺、男嫌いなんだよね」

不意に、ヨシヤくんも話し始めた。

「そりゃ友達だっているし、一緒にいて楽しいとは思っけど、男っていう性別は嫌い」

ヨシヤくんはそう言って、だけど首を横に振った。

「いや、べつに女になりたいってわけじゃないよ」

「うん」

なんとなく、わかるような気がする。もし女だったら、男だったら。そんな、実現しない無い物ねだりの感情。

「男って馬鹿なんだよね、基本。二言目には、やりたいだのなんだの」

その辺は、男子間のことだろうからよくは知らないけど、なんとなく、漏れ聞くことはある。

生物としては、そういう欲求は当然だろう。ヨシヤくんもわかってる。だから「男っていう性別が嫌い」なんて言い方してる。

「だから俺、ちょっと浮くんだよね。出家したなんて噂もたってる」

「そりゃー凄い」

私が拍手しながら言うと、ヨシヤくんは両手を掲げて応えた。顔は苦笑いだったけど。

「ホモなんて噂もあるけどね」

「え」

なんでオチをつけるんだろうね。まあ、違うからこそ、オチに使えるんだろうけど。

「いや女の子の方が好きになる割合は多いよ。でもこれは恋愛感情の好きじゃないから」

「like?」

「そう、like」

よくわかる。

「で、なんで、そんな話したの?」

「んー、ナナミが昔話したから。ついでついで」

「わけわかりませんな」

メールの着信音が、終了の合図みたいに鳴った。

「お、最チャラ男」

「最チャラ男……？ ああ、なるほど」

ヨシヤくんも理解したようだ。あだ名とは、そうでなくてはならない。

「『ヨシヤと何してんの？』だって」

実際はもつといろいろ、絵文字含めて書いてあつて、容量もそれなりだったけど、要約するとそういうメールだった。なんて薄っぺらい。

「何って……おしゃべり？」

「だよねえ」

そう書いて送信。

「あつちにも女の子はいるんだから、そつちと話せばいいのに」

「あいつらの共通見解としては、ナナミが一番可愛いってさ」

あんまり照れもせずに言われると、こっちにも照れる理由がない。だから照れない。

「そんなこともないと思うけどねぇ。ていうか、可愛いつてだけで理由になるの？」

「俺に聞かれても……」

それもそうだ。反省反省。

「あのイケメンくんはそんなことないじゃんね」

ちゃんとみんなと話してたからね。やっぱり恵まれてると余裕があるのかね。

「黙ってても寄ってくるだろうからね。あーあー、うーらやーますいー」

だいぶテキトーに言ってるっしやる。

「まあまあ、ヨシヤくんはあの中では二番だから」

「そりやどうもー」

こっちもスーパーテキトーに慰めておいた。まあ、だいたい本当のことだけどね、主観だけど。

「メールがきたぞー」

お知らせしてみた。着信音鳴ったし、言わずもがなだけど。

「えーと『ヨシヤ狙い?』か。ほうほう、ストレート」

この直球、どう打ち返そうかな。

「『サーティーンの如く狙ってる』でいいかな？」

「殺すつもりだったの？」

向こうはそう判断しないだろうけどね。どーせ。

「じゃあ『そんなことはありません。音痴だから逃げ出したのです』で。そーしん」

「音痴なの？」

「そんなつもりはないけど。建前ですよ」

たとえ音痴でも自覚はない。そういうものはず。

「じゃあ今度カラオケ行こう」

「え、一人で？」

主語を省略できるのが日本語。とはいえ、わざとらしい誤解だった。

「いやいや、そんな勇気ない。一緒にだよ」

女の子を誘う方が、より少ない勇気で済むんだね。お互い意識してないからだろうけど。

「いーよー。私のデスヴォイスで鼓膜をぶち破ってやるぜー」

「やっぱりちよつと考えとく」

でもなんか、これからもよろしく的な友達っぽくなったので、メールアドレスと電話番号を交換した。

「むむ、一日で三人も登録数が増えるとは、入学式以来だ」

「結構インドア派？」

「縁側つてどつち？」

ちよつと真剣に考えてみたら、ややこしかった。でも話し合いの結果、一応屋根の下で、靴を履いてないから、インドアということになった。

ここでまたメールの着信音。

「あ、最チャラ男？」

「その通り」

そして、ついにヨシヤくんも最チャラ男と呼び始めた。どんどん拡大することを期待。

「『そつちに行ってもいい？』だつて」

「本当に好かれてるねえ」

しかしいくらなんでも、来るなんて発想になるだろうか？ 恐るべし最チャラ男。

「『もう帰るので、すみません』これでよし」

送信した。こうして初合コンは、三人の連絡先を得て終了したのであった。

「じゃ、帰るって言っちゃったし、こっちもお開きにしますか」

ヨシヤくんが立ち上がって言った。つられて私も立ち上がる。

「そうだね。ヨシヤくん、最初っから眠そうだったもんね」

「走ったらわりと目覚めたんだけどね、それで疲れたから、すっごく眠い」

お互いの家の方角は、南西と南々西くらいの差だったので、途中までは一緒に行くことに。

それから別れるまで、いろんな話をした。あっちにいたりこっちにいたり、結局ほとんど記憶には残らなかったけど、楽しかったのは覚えていた。

「んじゃ、またいつかね」

「うん、暇なときメールする」

最チャラ男とは、決して交わされない約束を交わして、手を振りながら別れた。

総括すると、まあ楽しい日だった。

翌日。らいどおん電波

合コンの翌日。つまり今日は平日で、当然学校へと行く。

今朝、最チャラ男から「おはよう（以下絵文字）」のメールが届いていた。昨日は「おやすみ（以下略）」のメールが届いていたから予想はしていたけど、朝からあのメールは目に悪い。

そんな「おはようからおやすみまで」のチャラメールに、真面目に返信する私はとてもいい人だと思う。

対してヨシヤくんからのメールは来ていない。暇だったら、という予定だったから、さもありなん。

弱チャラ男からは、なんか質問メールが来ていた。相手を知りたがるのは人間の常とはいえ、若干気持ち悪いものである。べつに隠すことでもないことは教えた。でもさすがに住所は勘弁。

これが、帰宅後の概要。カナコに報告すれば、きつとこの成果に満足してくれることだろう。願わくば、もう合コンには誘わないでほしい。

学校に入る直前にケータイの電源を切った。もちろんメールの返信が面倒だったから。普段ならマナーモードに留めておく。

「おはよー」

教室に入ると、早速カナコが馳せ参じた。馳せ参じたって言うとなんか気分がいいね。

「で？」

「で……？」

いくら友達でも、一文字で意思の疎通は無理。

「ヨシヤくんとはどうだったのよー」

「べつにー？　ずっと公園で喋ってただけだし」

きゃっきゃうふふなんて全く無かった。期待を裏切ることには定評のある私。

「やっぱりねえ……あ、メールはちゃんとしてるの？」

「してるしてる。今朝も……えっと……な、ナカムラくんから来た」

思い出すのにしばらくかかったけど、そう言つとカナコはとりあえず納得したみたいだった。

「ま、最初はお友達からーって感じでも、いつの間にかラブラブかもね！」

「ないわー」

あんな原色ファッション、警戒色よろしく近寄れない。

「で、カナコは結局どうだったの？」

「べつつにーん。私は主催者ポジションだったからね。ていうか、実は彼氏もいるのよー」

「ええ？ それなのに合コンとか、いいの？」

「大丈夫大丈夫。実はあの中にいたから」

えー……。

「ナカムラくん？」

「ノンノン。その隣」

つまり、弱チャラ男だ。うわーお、なんて恋人関係だろうね。

「名前なんだっけ？」

カナコの彼氏なら、弱チャラ男なんて呼ぶわけにはいかないからね。

「カナムラくん」

ややこしい……。いや、使ってる音がまったく一緒だよ。ややこしいなんてもんじゃないよ。

「って、私、カナムラくんともメールしてるけどいいの？」

「あー。まあ、友達くらいならいいよって言ったし、付き合ってた言われたわけじゃないでしょ？」

「うん」

「ならよし。っていうか、ミナが付き合つとも思えないし」

その通りです。

「ミナの本命はヨシヤくんだもんねー」

「いや、違つ」

そこで始業のチャイムが鳴って、私の反論は形に成らずに消えていった。

それからの授業中、私はヨシヤくんについて考えてみた。

不細工ではない、むしろさっぱりすっきりした顔。頭もよさそう。ユーモアのセンスもある。……んん？ 結構イイ男な気が。

では恋愛は可能か。となると、どうだろう。

私の中でヨシヤくんは「いい友達」である。それはたしかに、友達の内では好意的な評価だ。でも、あくまで同性であるカナコと同列くらい。一番、ではない。

愛はある。恋はない。となるとこれは、ただの親近感なのだ。ヨシヤくんだって、そのくらいの感情のはず。

まあ、相手のことを完璧に理解してるなんてことは、妄想の類ではあるけれど。

「……はあ」

考えたら疲れた。たぶん恋愛を頭で考えてるあたりが、恋できない原因なのかも。

いや、したいわけでもないんだけどさ。

でも結婚はできる、かもね。恋してはないけど、愛してはいる（likeの上位）。まあこの理屈なら、性別の壁はあれど、カナコとも結婚できるんだよね。カナコ愛してるー。

あれ？ 恋愛より大事になってるかも。ていうか恋愛って、結婚までの過程なんだから、むしろ正しい？

ちょっと聞いてみよう。

というわけで昼食の時間、というか昼休み。私はカナコに聞いてみた。

「カナコはさー、カナムラちゃんと恋愛してるじゃない」

「うん、もうラブラブ」

そこまで聞いてない。

「将来的には結婚するの？」

するとカナコは、よく整えられた眉をひょこっと上げて、不思議がる目で私を見た。

「飛躍してない？」

「してるかなあ？」

過程と結果の関係にあるとは思っただけど。

「結婚、ねー。まったく考えないってわけじゃないけど、それほど現実的ではないねー」

「ふーん？」

「そんなものでしょ」

「ふふん、アラサーになってもそんなことが言えるのかな」

「誰目線？」

ノリで言ってみただけで、実際のところ、その前にカナコは結婚しそうな気がする。

「まあそれは置いておいて、カナコはヨシヤくんをどう思う？」

「あ、やっぱりヨシヤくんに惚れたんだ？」

「違う」

「ふーん。ま、男前じゃない？ 無表情だけど、そこがまた硬派な感じで」

「無表情？」

結構笑ったりしてただけだな。冗談ペラペラだったし。

「ミナにどう見えてたか知らないけど、ほとんど表情変わってないよ。他の子達も、近寄れないみたいだったし」

暇そうだったのはそのせいか……。

私は他人の表情の変化に聡い。なかなか便利ではある。なにより、後ろめたいことがある人は、見破ることができる。

「カナムラくんもナカムラくんも、あんまり仲良しって感じじゃなかったよ。あのイケメンくんが紹介したみたい」

「へえー」

そりゃテンションも下がるね、あんまり知らない人と一緒なんて私もだったけど。

「だから、ナカムラくんもまだチャンスがあると思ってるんじゃない？」

「ん？」

「無表情だから、愛想尽かすんじゃないかとか。言ってたよ」

「いや、たとえ愛想尽かしても、ナカムラくんに行くことはなくな
い？」

さすが前向きナカムラくん。

「知らないよそんなこと。ゼロじゃないでしょ?」

「百分率なのに小数第四位までいかないと自然数が見られないけどね」

「……何それ?」

「限りなくゼロってこと」

自然界にゼロは存在しないから、ゼロは自然数ではないとか何とか。そういう説明は省略。

「でもメールはしてるんでしょ?」

「まあねえ」

証拠を見せようと、ケータイの電源を入れてみた。

「うわ……」

電源を入れた途端、十通近くのメールが、なだれ込むかのように届いた。確認してみると、ほとんどがナカムラくんで、カナムラくんからは一通。

「ほら、凄くない?」

カナコに見せてみると、カナコは少し眉をひそめて、私のケータイを手を取った。

「……ねえミナ、お願いがあるんだけど」

「何？」

メールを見たカナコは、ケータイを両手で持って、表情を隠してしまう。私の特技を知った人が、たまにやることだ。

「カナムラくんからのメール、読まないで、返信しないで。来たメールは、私に転送して、すぐに消して」

ぶつ切りの言葉が、投げ付けられるように届いた。それ以上、説明する気も何もないみたいだ。

「……わかった」

私は押し切られたように頷いた。表情が見えなくても、わかることはあるのだから。

「ありがとう」

カナコはそれだけ言って、ケータイを置いて自分の席に帰っていた。

ケータイに残っていたのはナカムラくんのメールだけ。絵文字だらけのメールが、白々しく、取り留めもないことを知らせてきた。

そしてあつという間に放課後。あれ以来、カナムラくんからのメールは来ていない。

でもナカムラクんからのメールは相変わらず絶好調で、私も返信した。絵文字は最低限にしてくれと頼んだら、わりとあっさりそうしてくれたりもした。

カナコは普段通り振る舞っているけれど、時々何か真剣な顔で考え事をするようになった。あと、なぜか今日は一緒に帰ることになった。

「ちょっと待ってて」

校門まで行くと、たいてい足止めされる。他クラスのカナコの友達、カナコと立ち話を始めるからだ。私も慣れたもので、近くのベンチに座って、そこから前方をぼーっと眺める。

すると、ケータイが震えた。すわナカムラクんメールかと思ったけど、振動してる時間が長い。電話だ……おお、ヨシヤくん。

「もしもし？」

『あ、どーもヨシヤです』

久々に聞いた声。相変わらず、落ち着いてますな。実は私、未だに電話は少し緊張する。表情が見えないからね。

「どうも」

『どもども』

「どーもどーも」

『どーも』

このまま話が進まない気配を察した私は、用件を尋ねた。

『今週末、まあ土日のどっちでもいいから、買い物に付き合ってくれない？』

「んー、いいよ。何買うの？」

『妹の誕生日プレゼント。去年まではテキストに選んでただけど、なんか今年は服が欲しいらしくて。俺わからないから』

「へえ、妹いたんだ」

『まあね。あんまり似てないんだけど』

どうせ暇だし、行くことにした。とりあえず時間と場所を決めて、それではまたー、と何回か言い合って、結局私から電話を切った。こういうのは掛けた方から切るのがマナーだと、後で知った。

「お待たせー」

ちょうどカナコの話も終わったから、立ち上がって歩きだす。

「さっきの電話、誰？」

「ヨシヤくん」

私が答えると、カナコは芝居っ気たっぷりに口を手で覆って、数

歩後退った。

「ラブコール……！」

「違う違う」

ていうかラブコールって何。

「週末、妹への誕生日プレゼント選びを手伝って、てさ」

私がそう言うと、カナコは露骨に残念そうな顔をした。その顔のまま隣に戻ってきて、並んで歩きだす。

「なーんだつまんない。で、妹いたんだ」

「らしいね。あんまり似てないらしいけど」

「いつかミナはその子に『義姉さん』と呼ばれるんだね」

「ないわー」

たしかに妹が欲しいと思ったことはないでもないけど、だいぶ昔のことだ。

「ま、頑張ってたね」

「カナコも一緒に行く？」

正直、服選びにあんまり自信がない。カナコがいてくれれば百人力。

「用事があるのですわ」

だろうとは思っていたさ。

「デート？」

「んにゃ、別件。探偵ごっここの予定があるのよ」

探偵ごっこ……？

「まあ年甲斐のない」

「いくつになっても童心忘るべからずってね」

忘るゝのゝるゝの舌触りが良いね。るるるるー。

「そつえば、何時にどこで待ち合わせなの？」

「こないだの合コンと一緒にのところ。そこに十時」

「ふむふむ」

なんでそんなこと聞くんだろう？ でもまあ、たいしたことじゃないだろうから放置。

「じゃ、お互い頑張ってこー」

「おー」

テキトーな決意を確認し合って、それぞれの帰路に別れた。

期日。甘い幸福1/4（前編）

待ち合わせ場所には、なんと同時に着いた。というか、集合場所から五十メートルくらいのもので合流してしまった。お互い何も言わずに、とりあえず一緒に歩いて、集合場所に集合した。

「ごつめーん、待ったー？」

「いーやぜーんぜーん」

と、茶番劇を繰り広げて、お互いに溜息で一息ついた。

「そういえば、だいたい同じ方角だったね」

「だね。今度遊びにきなよ。妹も会いたいってさ」

「あ、うん。行くよ……お？」

「どうかした？」

視界の端に、私を睨みつけている女の子がいる。気のせいかと思っただけ、ヨシヤくんに向かって一歩踏み出すと、女の子の目つきがさらに陰しくなった。

「ふむ……」

ためしに前後にステップを踏んでみた。するとそれに合わせて、女の子の表情が目まぐるしく変化する。

なにあれおもしろい。

「右手プリーズ」

「ん？」

ヨシヤくんの手を取ってみた。手を繋ぐというより、握手みたいな感じだったんだけど。

「おちよくってんですかあなたはー！」

ついに女の子は叫びながら、私達に向かって走ってきた。

「妹さん？」

「……まあ、はい」

ヨシヤくんを確認すると、顔を引き攣らせながら頷いた。

「妹のシオリです。兄さんがここ最近お世話になってます」

「あ、こちらこそ」

シオリちゃんは私からヨシヤくんの腕を奪い取って、両腕で抱えた。渡さないとも言わんばかりに。

外見は可愛いというよりカッコイイ子だ。わりと長身で、スレンダー。仕草は子供っぽいけど、静かにしてれば同性にモテそうな感じ。

ただ、落ち着きはない。

「わたしも同行させていただきますね」

「あ、ちょうどいいね、一緒に買いに行こう」

「え」

「ん？」

シオリちゃんはなぜか狼狽している。

「なんかないんですか、邪魔するとか失せるとか」

「なんで？」

やっぱり一緒に選ぶ方が、買いやすいんじゃないだろうか。まあプレゼントのサプライズ感は無くなるけど、がっかりされるよりはマシ。

「だから俺、友達だって言ったのに」

ヨシヤくんが溜息混じりに言った。シオリちゃんは、なんか冷や汗をかいている。

「いや、とは言ってもですね、男女二人でお出かけ、これすなわちデートですよ」

実の兄にも敬語なんだねー。っと、どうでもいいか。

「まあそついう定義ならデートでも構わないんだけど、友達だつてだよな?」

「うん」

私の返事を聞いて、シオリちゃんはバースデーケーキの蠟燭を吹き消すかのような溜息をはいた。まだ早いよ。

「ですか……ですね、そうですね……この戦後最大級の朴念仁である兄さんが、恋人を作ろうなんて思うわけがありません」

戦前はどうかっただろう……じゃなくて。

「それはちよつと失礼なんじゃ……」

「いいっていいって」

ヨシヤくんは全然気にしてない様子。

それからしばらく、シオリちゃんはクネクネしながら思い悩んでいた。

あんまりにも考え込んでいたので、可哀相になってきた。

「ねえ、なんでそんなに悩んでるの?」

すると、シオリちゃんはボソツと衝撃的なことを言った。

「わたしが兄さんと結婚する計画が……」

「は？」

ケツコン？

「いえ、籍を入れようなどとは思っていません。法の壁は厚いですから」

「だ、だよー」

まさかとは疑ったけど、そんなことはなく、ちゃんと血は繋がっているらしい。

「ただ事実婚を狙っているだけです」

ブラコンだー。薄々感づいてはいたけれど。

「そのためには既成事実があるべきですよね」

そういう危険思想の持ち主らしい。私はヨシヤくんの貞操が心配です。

「つまり、女性に惚れるようになってほしいってこと？」

「ええそうです。でも、私以外に惚れられては困ります」

大変だなあ。よし、ここは（面白そうだから）協力しようではないか。

「じゃあ、目一杯可愛い格好して、ヨシヤくんをメロメロにしよう！」

「おお！なるほど！」

「何か不届きな発言が聞こえた……！」

ヨシヤくんの眩きを黙殺して、私とシオリちゃんは歩きだした。
少し遅れて、ヨシヤくんもついてきている。

「どんな服にしましょうか」

「何色が好き？」

「落ち着いた色の方がやっぱりいいですね」

「やっぱりねー。でもヨシヤくんは兄という立場上、そういう服は
見慣れてるだろうから、ここはあえて違った一面を見せて、ギャッ
プ萌え？みたいな？」

「ほほお……」

感心していただけたようである。まあ後ろ半分は、私がカナコに
よく言われることなんだけど。

とはいえ私も、普段は地味色な服しか選んでいないから、選択に
自信はない。ここは、先人の知恵を借りるべし。

「というわけで電話してみた」

『をいをい、探偵ごっこの最中なんだぜあたしゃあ』

もちろんカナコにである。

「え、本当だったの？」

『オウ、イエース。インド人嘘ツカナーイ』

「それ、日本人のカナコは嘘つくってことだね」

『まあね』

なんて不毛なやり取り。

『ま、べつにいいんだけどね。こうなったんなら、大丈夫だろうし』

「……うん？」

『こつちの話ー』

さすがは探偵、思わせぶりである。いや、探偵と関係あるかは知らないけども。

『で、なんの用？』

「うん、服選びのアドバイスが欲しくて。口で説明って、やっぱり難しい？」

『そりゃそーでしょー』

「あっはっはー」

『今からそっち行くからね』

「え？ いいの？」

『余裕できたからね』

待っててねーん、と電話が切れた。とりあえず、連れの二人にその旨を報告する。

「服選びの助っ人を呼んじやいましたー」

「おおー」

「どーもカナコでーすっ」

「ひいっ！」

まさしく「あっ」という間にカナコが現れた。ただ、普段よりは目立たない格好で、真っ黒いストレートのウィッグを着けている。それと伊達眼鏡。まさに探偵さんの変装。

「はじめまして、シオリと申します」

「あ、どうもご丁寧に。カナコと申します」

と、カナコは挨拶ついでにウィッグと眼鏡を取った。すると少し巻毛っぽい茶髪が出てきた。

「ああ……」

そこでヨシヤくんは、ようやくあのカナコだと気付いたようだった。遅い。

「それじゃ、行こうか」

カナコ先導で、予定の二倍になった四人で歩きだす。

「カナコー、探偵ごっこって何やってたの？」

ずいぶん近くにいたみたいだったから、ちよつと気になって聞いてみた。

「んー、尾行の尾行ってとこかな」

嘘は……無さそう。でも、その意味はよくわからない。探偵を尾行してたってこと？

「じゃあ——」

「ところで、予算はいくらくらいなの？」

なんか、意図的に切られた気がした。まあ、気のせいかもしれないけど。

ヨシヤくんはしばらく目をさ迷わせた。

「選んでからにしようか。気にしない方がいいでしょ」

選んでから除外していく、と。合理的っぽい。

「よっしゃ。ふふふ、素が良いから楽しみだなあ」

これからシオリちゃんは着せ替え人形にされるのだろう。カナコの目を見て、そう思った。

しばらく歩いて、お店に到着。とりあえずカナコとシオリちゃんは、ヨシヤくんを驚かせたいからと、二人で消えてしまった。

というわけで二人きり、何の気無しに店内をぶらつく。

「なんか、賑やかになったね」

「まあ、いいんじゃないかな。シオリも楽しそうだし」

今頃着せ替え人形だろうけどね。

「ついでだし、みんなでパーティーみたいなことでもやろうか。まだ少し早いけど」

並んでる服を私がぼへえーつと見ていると、ヨシヤくんが黒いハットを被ってみながら言った。ふむ、わりと似合う。しかし、それは女物だ。

「いいねー。パーティーが多いってことは幸せってことだね」

「祝い事は、賑やかな方がいいし」

ヨシヤくんは盛り上げるってタイプでもなさそうだしね。

「どうでやる？」

「ウチでいいならいいよ。今日は親も用事でいないから、騒いでいいし」

たしかそれなりに近所だったよね。

「じゃあ、ケーキでも買っちゃう？」

「そうしようか」

とりあえずカナコとシオリちゃんは長くかかりそうだったから、二人で手分けしてパーティーらしいものを買いに出発した。

「ほー」

私はパーティーグッズを買いにきた。このお店とケーキ屋とでは、明らかにこのお店の方が遠い。ヨシヤくんは気遣かって、遠い方に行こうとしていたけど、私の要望で、ヨシヤくんがケーキ担当に。

こっちの方がワクワクしそうだから。

とりあえず、盛り上がりそうなものを買って物カゴに放り込みながら歩いていると、芸能人やら総理大臣やらのマスクを見付けた。

総理大臣はつい最近代わったばかりにも関わらず、すでに新総理のマスクが店頭に並んでいた。

「いつでも『最近代わったばかり』って言ってるなあ」

前総理のマスクは、なんか安くなった。でも買わなかった。すでに過去の人だから、盛り上がりには欠けるだろう。

そんなふうになんとなく社会派っぽく振る舞っていると、なんか視線を感じた。店員さんかと思ったけど、見回しても誰もいない。

「あらら……？」

目の前のマスクからだろうか。たしかに、総理達は虚ろな目で私を見ている（気がする）。

「そんなに見ても、私は未成年だからね。投票権はないんだよ」

ためしにそう言ってみると、見られてる感じは消えた。もしや、視線の主は本当にこの総理達なのかも。呪いの仮面が出てくる怪談はたくさんあるし、ちよつと鳥肌が立った。

そそくさとレジでお金を払って、急いでお店を出る。

服屋に戻る道すがら、ケーキ屋を覗いてみたけど、すでにヨシヤくんはいなかった。ちよつとのんびりし過ぎたかもしれない。

すこし速歩きで服屋へ向かう。ペタペタと、薄っぺらい靴底が音を立てる。ヒールを履くとガタガタになる私の足は、あくまで実用的なのである。

そのペタペタに重なって、コツコツコツと、決して鶏の鳴き声ではない音が聞こえた。

「……………」

ショーウィンドーを覗くふりで足を止めると、硬質な音も止まる。

念のために何度か同じことを繰り返しても、結果は同じ。

かなり低確率な偶然じゃなければ、つけられてる。とすると、さつきマスクの前で感じた視線も、そういうことになる。独り言聞かれてたかも。恥ずかしい。

尾行するのにその足音はどうなんだ。ゴム底の靴を履け。

ああ、思考が纏まらない。動揺してます。

さて、どうしよう。走って撒くのは……相手の体力がどの程度かわからない。疲れたところを襲われるかもしれない。つけられてるだけなら、当面は安全なのかしらん？ とにかく、周囲の人通りが途絶えないことを切に願う。

何が目的かは知らないけど、早くヨシヤくん達と合流するべきだろう。四人もいれば、さすがに諦めるはず。……何を？

たたたたー、ざくー、きゃーまっかなはながー……たたたたー、がしーっ、もがもがー、あーれー……。

通り魔的犯行と誘拐を、柔らかめに表現してみた。怖くはなくなったがしかし、私の思考回路の退化具合が怖くなった。

ラヴは人を若返らせる（おうえっ）らしい。したがって脚も若返った気がしたので、ついでに童心を取り戻そう。

「準備運動はいらない？」と自問して「若いもんね」と自答した。ラヴ（博愛）で若返ってますので。

そうして若さに任せて走りだそうとした矢先、進行方向からヨシヤくんが歩いてきた。ご都合主義だね。

「やっぱり俺が行った方がよかった？」

私が遅いから迎えにきたらしい。ナイスタイミング。

「いやいや、楽しかったから」

なんかスリルもあつたしね。

「そう？　へえ、いろいろ買ったね」

袋の中を覗きながら、さりげなく代わりに持つてくれる。さりげなさに好感度アップ。

二人並んで歩きだして、足音は二人分。どうやら追跡者は撤退したようだ。

体力は未知数だけど、男の子のヨシヤくん。いざというときには、なんとかしてくれるはず。

「ヨシヤくん、喧嘩強い？」

「何？　いきなり」

「女の子は、強い男の子に惚れるものよ」

「嘘くさー」

そりゃそうか。何より私に似合わない言葉なんだから。

「てゆうか、ここ十年喧嘩なんてしてないよ」

予想通りというかなんというか、さすがおじいちゃん。

言わなくてもいいか。勘違いの可能性だってある。というか、そ
うちの方が有力だ。

じゃあ、もし狙われてるのが本当で、それにヨシヤくんが鉢合わ
せたら？

「逃げるが勝ちだよな」

「うん、まったくね」

それならそれでいい。危険を感じたら逃げればいい。ヨシヤくん
に何かあつたら、シオリちゃんも悲しむ。もちろん私も。

助けてほしいのは確かだけど、私一人でだって、助かれる可能性
はあるんだから。

何もかも、取り越し苦労なら最高だね。

「そーだ」

ふと、ヨシヤくんが上着のポケットから何かを取り出した。

「はい、あげる」

「……クッキー？」

しかもハート型。それが一枚だけ、小さいビニールの袋に入っていて、口がリボンで閉じられている。

「オマケだってさ」

ケーキを買ったら付いてきたそうだ。とりあえず受け取って、しばらく眺める。

一口サイズのそれを、袋の中で四つに割って、欠片を一口に放り込む。

「甘いね」

ヨシヤくんの口にも、一つ放り込む。

「うん、甘い」

残り二つは袋の中。ヨシヤくんはそれを不思議そうに見た。

「幸せは、みんなで分けようと思ってね」

「なーるほど」

単純な幸せだけど、たぶん幸せっていうのは、みんな単純なものなんだと思う。

「幸せは倍で不幸は半分ってやつ？」

「四倍で、四分の一だよ」

「最高じゃん」

お互い笑い合って、早速、幸せが二倍になった。

期日。甘い幸福 1 / 4 (前編) (後書き)

後編は、書いてしまったら投稿して、その翌日に前編と纏めます。

長くお待たせすることになります。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3876u/>

曖昧my愛

2011年11月8日19時12分発行